

第8回ヘルシー・ソサエティ賞

各分野の多彩な6人が受賞

ジャーナリスト 小川 明

健全な社会づくりへの 貢献たたえる

健全な社会は、多くの人々の努力によってつくられている。東日本大震災を経験した日本で、その思いが強まった。より健やかな社会を築くための個人の素晴らしい努力をたたえるヘルシー・ソサエティ賞の授賞式が4月10日、東京都千代田区の帝国ホテルで開かれた。受賞者は、教育部門が片田敏孝・群馬大学大学院工学研究科教授と赤木洋勝・有限会社国際水銀ラボ所長、ボランティア部門が國松孝次・認定NPO法人救急ヘリ病院ネットワーク理事長、楠川富子・JICAシニア海外ボランティア、カンボジア国立小児病院看護部長、医療従事者部門が秋山正子・株式会社ケアーズ代表取締役、白十字訪問看護ステーション統括所長、大森安恵・東京女子医科大学名誉教授、海老名総合病院糖

尿病センター長の6人。同賞は、日本看護協会（坂本すが会長）とジョンソン・エンド・ジョンソングループ日本法人各社が2004年に創設し、今回で8回目。他者への思いやり、人々のために奉仕するという日本の伝統を引き継ぐ各分野の多彩な顔触れが受賞者にそろい、約600人が参加した祝宴で受賞を祝福した。

4閣僚が祝辞

授賞式では、日本看護協会の坂本すが会長が「昨年は東日本大震災を体験して、日本にとって苦難の年でした。今年の受賞者も思いやりや奉仕の精神にあふれた素晴らしい方々ばかりです」とあいさつした。また、米国ジョンソン・エンド・ジョンソン社のドミニク・カルソ最新高財務責任者は「受賞者は、日本の誇る国民皆保険制度を通じて、日本の福祉に尽くされた方たちだ。栄えある受賞者をたたえたい。よりよい日本と世界のために、皆さまの今後の成功を祈ります」とスピーチした。



授賞式で歓迎のあいさつをする坂本すが
日本看護協会会長

第8回ヘルシー・ソサエティ賞の受賞者たち=4月10日、東京・帝国ホテル

成23年度 第8回ヘルシー・ソサエティ賞



地域看護業務連絡会の委員を務める。また看護学部非常勤務講師、30年後の医療の姿を考える会会長、NPO法人白十字在宅ボランティアの会理事長。著書に『在宅ケアの不思議な力』や『在宅ケアのつながる力』など。

日本で訪問看護制度が創設された92年当初より訪問看護師として活動を開始し、バイオニアとして在宅ケアの推進に貢献してきた。末期がんと実姉が「自宅で過ごしたい」と望み、一人の看護師としてその思いを支えた。姉が家族と過ごす様子を見て「家で暮らすことには、底知れぬ力がある。それを支える仕事がしたい」と思い、在宅ケアに取り組んだ。現在は東京都内を中心に訪問看護活動を展開、在宅ケアを支える地域医療人材養成に貢献している。さらに、地域の高齢者が住み慣れた場所で、安心して豊かな生活が営めるよう「聞き書きボランティア」の養成にも取り組んでいる。多彩な活動で在宅ケアの質の向上に努めながら、地域の絆づくり



秋山正子・白十字訪問看護ステーション統括部長

に尽力し続けている。

授賞式で秋山統括所長は「看護師の道に入って40年間、その半分は訪問看護で過ごしました。目まぐるしい変化があり、病院中心の医療から在宅医療へと舵を取り始めました。寝たきりの予防にも取り組みたい。在宅分野の発展の中で看護の役割を確立したい」と話した。

糖尿病と妊娠の分野を創設

海老名総合病院糖尿病センター長
東京女子医科大学名誉教授 大森安恵

高知県安芸市出身。56年東京女子医科大学卒業。61年から特に糖尿病と妊娠をテーマとした臨床分野の研究を推進。講師・助教授を経て同大学糖尿病センター教授。91年糖尿病センター所長兼主任教授となり、定年退職後は名誉教授。済生会栗橋病院副院長を歴任し、02年海老名総合病院（旧東日本循環器病院）糖尿病センター長を務める。著書に、若い糖尿病患者たちに勇

気を与える『彼岸花の鎮魂歌』など。

日本の医学界に「糖尿病と妊娠の臨床および研究分野」を創設し、当時「糖尿病があれば、妊娠してはいけない」と言われていた女性患者の人生を、子どもを持つことのできる明るく豊かな生活様式に変えた。欧米で「糖尿病と妊娠」について学び、「良好な血糖コントロールができれば、妊娠、出産が可能であること」を示し、64年、東京女子医科大学病院で初めての糖尿病妊婦の出産を成功させた。妊娠を希望する多くの糖尿病の女性が各地から受診するようになり、糖尿病の女性に喜びをもたらした。85年には「糖尿病と妊娠に関する研究会」を創設。代表世話人として良好な血糖コントロールを訴え、周産期死亡率を11%から2%まで減少させた。この研究会は2000年に日本糖尿病・妊娠学会に発展し、05年まで理事長として、この分野の研究と治療レベル向上に心血を注いだ。97年に女性として初めて日本糖尿病学会長に就任、07年2月には国連で母子を糖尿病から守るための演説を行うなど、女性の社会的地位の向上にも貢献している。

授賞式で大森名誉教授は「私が医者になった昭和30年代は、糖尿病の女性に妊娠を許すべきでないという意見が大半でした。死産した2人の患者の悲しみを共有して、糖尿病患者の出産を実現していた欧米に学び、多くの人を助けてきた」と足跡を振り返った。



大森安恵・東京女子医科大学名誉教授